



間違いを言語化する

ここのところ政治家の失言が話題になって困ったものである。釈明の場で多くの政治家が「軽い気持ちで」と発言するが、それはなおさら悪いと言わざるを得ない。「重い気持ち」なら、よくよく考えての発言なのだろうから、そこには何らかの思いや考え、政治的な意図などがあるに違いないと色々考えることになるわけが、「軽い気持ち」ということは、それがそのままご本人の本音であるということ告白しているのであって、結果としてそれがご本人の人柄そのものということになるからである。

…などと偉そうなことを書いたが、教員も色々生徒の気持ちを傷つけてしまう発言をしがちなものだ。それこそ「軽い気持ち」で言った一言が、一人の生徒に大きな影響を与えてしまう場合もある。40人もの個性的な諸君を前にしているわけだから、常に発言には気をつけなければいけないのだが、それでも「つい…」ということがあるのである。クラスの39人が面白いと思った言葉であっても、1人の生徒がそれによって傷つくとすれば、その発言はやはり間違っていたと言わざるを得ないだろう。

大切なことは、その間違いを素直に認めて受け止め、反省し、次に生かすことができるかどうかだろう。もちろん、失言しないのに越したことはない。自分の言葉の持ち力を自覚し、その言葉がどのような結果をもたらすかに対して、常に謙虚であることが求められる。しかし、それでも人間とは誤りを犯してしまうものなのである。(政治家の中に失言を繰り返す方がいるが、注目されていること

が分かっているにもかかわらず失言を繰り返すということは、自分の正しさのみを信じて反省していないということである。それは奢りであり、国民の負託に対する背信行為といっても過言でないと思う。)

*

繰り返すが、大切なことは失敗から学ぶことである。で、突然「目の前」の話題になるわけだが、復習しない模試ほど意味がないものはないのである。

学校全体では1回、さらに個人ではすでに2～3回模試を受けた人もいるだろう。その模試の復習が確実に行われたのだろうか？もちろん、記述模試とマーク模試では形式にも内容にも違いがあるだろうが、どちらにしろ、出題の根底にあるのはその教科の基礎学力なのであるから、受験した模試ごとにきちんと復習しておくことが肝心である。

その際、なぜ間違ったのかを言語化することを勧めたい。例えば英文解釈なら「●●という単語の意味を間違えたのと、この形容詞節が掛かっていく語を取り違えて、文全体の構造が捉えられなかったためにうまく訳せなかった」とか、数学なら「この場合分けを想定するのを忘れた」といった風に、自分で自分に対して間違った原因を説明してみる、できならそれをメモしておいて、それを模試と一緒に保管して、入試直前に再度見直せるようにしておくのである。

間違いを言語化できるということは、間違いを正確に認識できているということの証でもある。しっかり復習しよう。